

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第146号（2018年7月）

風に吹かれて（123）

白井啓治

・季節のそんなに急ぐな 熱帯夜の続く

今年は、年が明けると寒波が襲来し、厳冬だと思っているうちに、厳冬がカットアウトするように春がやって来て、梅も桜も菜の花もチューリップも全部の春の花が一斉に咲いて、そして散ってしまった。そればかりではなく春の花が散ると、はやばやと梅雨の入りがあり、それ程の雨量のない中に六月下旬には梅雨明けをってしまった。

四季の移ろいが早いだけではなく、地震や火山の噴火が頻発している。異常と思える気象現象や自然災害の起こる年は、人間社会も自然の異常現象に合わせるかのように混乱をきたすようである。

自然の中に生きている以上、自然環境とは無関係には生を営むことのできないことは容易に理解できる。しかし、暫しの平穏が続くと、人間だけが不穏を志向するというのはどういふことなのだろうか。それを人間の性と断言し、甘受しようとする者もいるだろうが、それではあまりに情けなく思ってしまう。

国政の場を見ていると、安定多数の与党は胡坐をかいて、先ずは詭弁を弄し、次には捏造を始め、立ちいかなくなると開き直りをする。今年の気象現象、自然災害のようである。

政権与党の驕りは官僚にも波及し、その様相は目を覆うばかりである。国を経営するスタッフとは言えないだろう。行政の呆け様は、韓国のテレビドラマの内容そのままである。ドラマの中では、その終わりは勸善懲惡で締めくくられるのであるが、現実の世は勸善懲惡はなく、悪い奴ほどよく眠るである。

七月十六日月曜日（海の日）に、当ふるさと風の会十二周年祭・第二弾として「ふれあいの里石岡・ひまわりの館のホール」にて、ふるさと風劇団ことば座の定期公演を行う。今回の常世の国の恋物語第三十八話は「龍（Ryu）」であるが、捏造から開き直りに至る今日を意識したわけではないが、人の愚かについて龍の語る物語となった。

中の一節に：

「言葉とは、便利なようで実はこれほど不自由で不平等なものはない。言葉を素朴な音としてみれば、その音に微妙で繊細な感情を伝えることが出来る。ところが人間の使う言葉はどうだ。伝えたいことが微妙であればあるだけ、それを言葉にする」と本質は遠ざかってしまう。本質から遠ざかってしまった説明の言葉で対話をしているとそこには対立が生じ、対立の中に我欲を芽生えさせてしまう。我欲を持った対立の先には、傲慢と破壊しかない。人間社会で殺戮を生み出す諍いが生ずるのは、真実の伝達が出来ないからである。真実の

伝達を考えあぐねていると、心の隙間に姑息な邪心が芽生え、卑猥を容認してしまう。結果、我欲を容認してしまい、俗に言われている非道を納得してしまふ。それが人の世だ。」

…と書いたが、龍の人の世を見る目は確かだったと思わずにはいられない。

これまで幾度か挿入してきた舞歌を今回も龍の謡う詩として再挿入した。

『人の世は

しばし旅居の仮り枕

命の永久になかりせば、

仮りの枕に欲の積めども
明日の夜明けの見るは難し

明日の夜明けの見る難し
人の世は

ただただ春の夜半の月

ただただ春の夜半の月

おごれる者も猛き者も

時の波間の流木に縋るもついに沈みけり
朧なる湖上の月を映しみて

君思うことこそ真なれ

君思うことこそ真なれ』

今回の「龍（Ryu）」では、龍が地球にやって来た目的を、「地球の姿を、地球の時空の流にのってただただ見ている」としたのであるが、摩訶不思議の宇宙であれば、龍の様に何の感情も持たず、ただただ人間の有り様を眺めているものが居ても不思議はない。そう思ったとき、見られて恥ずかしい様をなくさねばと無意識に自分を振り返っている自分に気づき、可笑しくなった。

何かが狂っている

菅原茂美

どうみても世の中が狂っている。気候変動ではない。人間活動が常軌を逸している。

人類は他の動物に比べ、はるかに知能が優れ、道義を弁えた高貴な生物……などと自己礼賛する向きもあるが、何を「寝言」仰いますか？

同じ大型霊長類でも、オランウータン、ゴリラ、ボノボは仲間同士の殺し合いはしない。人類とチンパンジーのみが、凶暴な殺し合いをする。しかもチンパンジーは子供を殺して食べる事さえある。ゴリラは、あんなゴツイ顔をしているが、心は優しく、仲間を殺すなどの暴力は、厳に慎むように規律が浸透している。人類より、精神構造が高度に発達しているとも言える。

更にボノボは、縄張りの境界線で群れと群れが衝突しそうになると、互いに群れの雌を相手のボスに差し向け、慰め合い、闘いは起らないという。人類が学ぶべき高等の「サル智慧」。

大方の人類は、道義を弁える理性を持っているが、一部、手の付けられない凶悪犯がしばしば出現する。古今東西よく見られる現象である。しかし、それよりも恐ろしいのは、凶行の実行犯ではなく、現場を統括指揮し、人を操る立場の者が、世にも恐ろしい計画を企て、皆殺しの命令を下す最悪の事例だ。いわゆる戦争犯罪人だ。ムソソリーニ、ヒトラー、スターリン、東条英機等歴史上、幾多の犯罪者がいた。敵に対しても味方に対しても、命の尊厳を重んじる姿勢など、微塵も見られない。己の勲功だけが重要。この事実こそ人類が長い間、積み重ねてきた歴史の醜い真実である。大河ドラマ「西郷どん」を見て、安政の大獄に腹が立つ。

米国では「進化論」の授業を禁ずる州が多数。

バイブルだけが総てであり、神が人間を創造したと信じ、サルからヒトが進化したとする進化論は暴論。授業をした教師は殺されている。

また、かつて英国の王立考古学会は、アフリカで若い学者が化石人骨発見の報告をすると、袋叩き。サルとヒトの中間に位置する化石など、いたずらの偽物と決めつける。もし人類に進化が行われたとするなら、アフリカのような野蛮な所でヒトが進化するわけがない。当然この英国あたりで進化したに違いない……とされた。権威ある老学者は、その地位を維持するのに懸命。

インドのヒンズー教徒は、牛を神様の使いとして崇める。その為、他教徒が牛肉を食べたり、牛に労働などさせれば、その人を殺す事もあるという。原理主義の物凄さは、イスラム教だけではない。狂った信者の執念は奥が深い。

所でかなり文明が進歩しているにも係らず、なぜにこうも世が乱れ、争い事が止まないか？ 人類は「万物の霊長」などと、自己陶醉の言葉だけが先走り。実質はドロドロの生存競争。弱肉強食の弱い者いじめ。他をこき落とし、己の優位のみに専念する。狂った世界だ。

＊

さて狂気の沙汰は無数にある。世界的には、前任者懸命の成果の例えは、EU・パリ協定・TPP等、政権が代われば簡単に反故・離脱。

更には史上幾多の〇〇合意破棄、△△条約破棄↓戦争突入等、いずれも国際道義無視。

近年は知的財産権侵害のため、日本開発の新幹線は、競争入札で、中国に敵わなくなった。その他幾多の工業製品など、かつて日本が犯した罪が逆に今、途上国にやられっぱなし。

企業や政府も、かなり信用できない。大企業の検査記録改竄、政府の公文書改竄や隠ぺいなど多々あるが、何が一番狂っているかというと、日本の国会。殆どの政府提案は野党が寄つてたかつて潰そうとする。与野党どちらが狂っているのか、双方なのか、下品極まりない。働き方関連法案では、何日も野党は国会出席拒否。出席もしないで審議未了……とは、どう解釈すればよいのか。大臣の解任決議案の連発。ダラダラと日を送り、無駄な費用を増やし続ける。足の引っ張り合いを楽しんでいるみたい。世界情勢が緊迫しているというのに、カケだ、モリだとケンカしている場合ではない。国民はもう飽き飽きだ。真相究明は必要。だがそんなものは、何らかの小委員会に任せればよい。

多くの無駄遣いが国の借金を1071兆円に膨らました。世界最大の借金王国。国会議員に重大な責任がある。勿論そんな議員を選出した国民も責任重大。代議士は、借金を増やす議決をした責任上、自分でその一部を返済しろ。自民党はGDP比1%の現状国防費を、EU並みに2%に引き上げようとしているが、憲法との整合性をどう考えているのか。軍事費増で国威発揚？ 最低の発想だ。

それに衆議院の決定が参議院に優先する件がいくつもあるのなら、巨大借金削減策として、参議院を無くすればよい。そして議員数も給料も、もっと減らせないのか。会社運営なら当然行われる決断である。逆に一票の格差解消のため、国会議の増加を目論んでさえる。

それ政党交付金だ、政務活動費だと、国税の濫用。国会議員はサラリーマンか？ 名誉職なら借金とは自前で支払え！ とにかく国の借金は、代議

士には、相当分を支払うべき義務がある。

ドイツのメルケル首相は、ある年度末に余剰金が生じた。国民は壊れた道路の補修に回せと迫った。しかし首相はそれを退け、全部、国の借金返済に回したという。政権を担う者は、世論に惑わされず、これくらいの非情の決断が必要である。借金の付けは、次世代に残すな！

政府は1071兆円の借金など、国有財産を処分すれば、チヨロイもんだと考えているかもしれない。総理の知人に国有地を8億円もおまけして売却した事は国民を欺くもの。今、保持する国有財産は、今の入達だけの財産ではない。子孫にもその所有権が存在する筈。

与党は多数決の原理でまず集票に専念する。その為に補助金濫用で、要らざる補助金をばらまく。働けるのに生活保護費を支給する。後継者がいなく、活用しない農地を「耕地整理」して、莫大な補助金を出し、多額の国費を浪費する。

更には巨費投入の諫早湾の水門は、裁判の結果、閉じても開いても、国は漁民・農民双方に補償金を支払っている。なぜにそんなものを造ったのか？ その他多くの干拓事業や、堤防建設。巨大ダム。高速道路網の過剰整備。港湾・空港。本当に国民に必要不可欠の緊急を要する事業だったのか？ 非情の決断はできないのか？

人類は大脳進化で、盤石の文明を確立し、神の領域に近づいた？ とんでもない。私に言わせれば、片手落ちの、兎戯に等しい。そう言われるのが嫌なら「万物の霊長」などと、自己陶醉する誉め言葉は止めろ！ この惑星に君臨する王者などというのは、あまりにもおこまがしい。

己をコントロールできずに、無尽蔵に人口を増やし（地球の人口収容能力は50億人。現在すでに74億人。今世

紀半ばには100億人に達する見込み、互いに縄張り主張で諍いが絶えない。諸悪の根源は人口過剰。食い物の奪い合い。野生動物と何ら変わらぬ。

小さな島でバツタが増えすぎ、草を食べ尽くし、集団飛蝗の成れの果ては海の藻屑。人類の終末時計は残りあと2分とか。人類こそ正に「準絶滅危惧種」の筆頭だ。狼は食糧が少なければ、交尾をしない規律を、しっかり守っている。

*

【狂い】の例を挙げ、個別に検討を加える。

① 地球環境の汚染

『現在の地球は子孫からの預かりもの』という概念から考えれば、20〜21世紀の人類は「もの」を造り過ぎる。物を作れば当然、カスや屑が増える。エネルギーも大量に消費する。更に空気や水や土壌を汚染する。CO₂濃度も、200年前の産業革命当時は280ppmであつたが、現在は日本で408ppmと実に45%も上昇。このまま増え続けると、惨憺たる悲劇が待っている。

気温上昇は、海水面の上昇ばかりでなく、北極圏の水が融解し、寒気を固定できず、寒暖の変動が激しくなる。その結果は、爆弾低気圧などで集中豪雨。山崩れや河川水急増で堤防決壊。

地球温暖化で最も恐ろしいのは、マラリアなど熱帯病が、多くの人口を抱える温帯地方にも常在化する事。媒介する「蚊」などが、緯度を遡り、生存範囲が広がるからだ。日本脳炎を媒介する「コガタアカイエカ」は東北北部には生存しなかったが、今は北海道南部にまで生存する。日本脳炎は人畜に莫大な被害を齎す。

温暖化防止対策費を生むため、ニュージーランド政府は、羊のゲップやおならのメタンガスは無視できないとして、羊に多額の税金をかけている。

人間も過食で、ゲップやおならの多発は、地球温暖化の大きな要因。

過剰な物作りは水俣病や、イタイイタイ病など、公害も多発。いずれも経済第一主義のため、吟味不足で、要らざる物造りの過剰現象が原因。

世界各地でクジラの遺体が多数。胃の中には、プラスチック製品が大量に。海底はプラスチックの微細なゴミで生態系が狂っている。世界で年間4億トンのプラスチックごみは、地球破滅につながる。それに貴重な動植物の乱獲。メタルの枯渇。愚かなりし人類。

日本でも経験した、工場や自動車の排気ガスで、今や中国やインドは喘息や肺炎多発。人類に知恵があるならば、一向に止まらないその傾向を早急に修正しなければならぬ。子孫が安住できる環境整備は、喫緊の課題である。

*

② 貧富の差

人類史を顧みれば、遊走生活をする狩猟採集時代は、衣食住について、恐らく貧富の差は殆どなかったであろう。いくつかの家族から、屈強の男が狩りの協働作業に当たる。当然獵の成果は、均等配分。貧富の差などなかった筈。

人類に貧富の差が生じたのは、ほぼ1万年前、メソポタミアあたりで、農耕牧畜の定住生活が始まってから。最初はみんな平等に働き、均等に分け前を受けていたであろうが、その内、何かしら権力を発揮し、自らは働かず号令をかける支配者が誕生した。汗水流して働く労働者と、働かずに威張りちらす一握りの支配階級が徐々に生まれた。それが尾を引き、今日では大きな格差に発展。資本主義社会の宿命なのか矛盾だらけ。いや共產主義社会でも、独裁性が強く、支配階級と一般大衆

との間には、やっぱり格差が生じているようだ。動物世界にも階級制度は見られるが、人類は折角大脳が発達したのだから、一様に不満のない、平等社会が構築できないものかとも思う。あくまでも強い者が保護されるように世の中の仕組みが構築される。これを改めなければ、人類は真の進化をとげた高等生物とは言えないであろう。

【参考】長者番付16年度世界第1位は、米国マイクロソフトのビル・ゲイツで、9・5兆円。17年度はやはり米国「アマゾン」CEOのジェフ・ペゾスで11・8兆円と言われる。いづこの国でも、わずか数%の富豪が、国の富の8割方を占める現況である。真の平等は永遠の幻か？】

＊

③武器の威力拡大

これはなんたるこっちゃ。狂った人類が反省すべき最大の課題だ。今、世界9か国（米・ロ・英・仏・インド・パキスタン・イスラエル・中国・北朝鮮）に、核兵器は約15000発存在。偽文明が開発した悪魔のオモチャの廃絶を訴え、オバマ前米国大統領はノーベル賞を受賞した。悪魔と良心との葛藤。人類はいい加減目を覚まし、武器の威力拡大競争に終止符を打つべきだ。

そこで私の提案。日本は憲法で武力を持たない事になっている。ならば半端な武器など持たずに、その軍事費を徹底的に福祉医療、例えば、がんの予防・早期発見・早期治療開発に全力投入すれば、全世界から尊敬され、人類を救う事になる。iPS細胞による早期治療が活用できれば多くの患者を救う事になる。善は急げ！何を犠牲にしても、早速取り掛かるべき事案だ。

＊

④原発

東日本大震災における原発事故は、その恐ろしさをいやというほど見せつけた。人間の習性は、分かっちゃいるけど、なる事ならば余計な経費は省きたくなる。1100年前の貞観地震では20メートルを超える津波があり、2011年の東日本大震災では、岩手県大船渡市で、津波の高さは40・1メートルであった。過去を念頭に置けば、原発ともあろうものは、当然、過去最大の津波より更に大きい事態を考えておくべきだった。トイレのない新築家屋などありえない。原発はその廃棄物の処理方法さえ定まっていない。完璧な対応策のない危険物ほど怖い物はない。

＊

⑤科学の進歩に歯止めを！

科学の進歩こそ、人類に福音を齎す最大の原動力。私は単純にそう考えてきた。しかしそれは本筋か？ 最近そう疑問を持つようになった。

ダイナマイトは建設工事などに多大の貢献。しかしそれが銃器の火薬として活用されれば、凶器となる。人類史においてノーベルは犯罪人ともなりうる。アインシュタインは軍から強要され「核兵器」の研究をし、遂には原爆に繋がった。神の領域に手を染めることは、一歩間違えれば人類滅亡に繋がる。

更に人工頭脳（AI）が、碁や将棋で人間を負かす分には、ご愛敬だけど、兵器に組み込まれ、機械が勝手に判断し、前線で活躍したら、どうなる？ 恐るべきモンスター凶器となりうる。

愚人の杞憂と笑うなかれ！近未来にありうる話だ。多くの文明の利器による公害等事故原因は、結局それを使う社会が未熟であったという事。奥の奥を読みきれない未熟さの典型例。文明進化はそんなに急がなくてよい。誰かに先

を越され特許を取って先に儲けられる…との焦りから未完成でも世に出す。文明進化はゆっくりでよい。充分吟味した後で世に出せばよい。

＊

⑥国境線

鳥インフルエンザの防疫を担当した時、シベリアからウイルスを持って飛来した渡り鳥が、人間の作った「国境線」などというもののナンセンスを、せせら笑っているように思えた。なにが国境線ですか？病原体や黄砂・煤煙・植物の種子・動物などにとって、人間が国境線に拘り、線を引いたり、壁を造ったりするナンセンスは、ばかばかしくて笑止千万。一丁からかってやれ！ぐらいに思っているのかもしれない。人間の狭い縄張り根性。地球上全ての現生人類

は、今から7万年前アラビア半島で、わずか数百人の黒人を元祖としてスタート。同族なのに、皮膚の色や神が違ふとか、呆れ返って嗤う気にもならない。折角大脳を膨らましたのなら、国境線など廃し、世界は一家。全世界の全人類は一緒に運命共同体。狂った歴史を正常に戻せ！

＊

多くの事例をあげ、吼えまくったが、ではその「狂い」を修正する方法はあるのか？ と問われれば、私の答はただ一つ。全世界の誰もが、今、自分のやっている事、或いは、やるうとしている事は、神に向かって決して後ろめたくないのか…？ と質す事。一点の曇りでもあれば、その行為を再検討するか、中止する事。

八十路を過ぎて、いささか吼えすぎと疎まれるかもしれないが、狂いっぱなしのこの世相に、とても黙ってばかりはいられない。老犬は脇目もふらず、なおも遠吠えを続けるつもり。

地域に眠る埋もれた歴史(40)

木村進

・六部台(染谷)

自分の住んでいる地域や用事があつて出かけたときに見かけたお寺やお堂などをブログ記事にして、その過去の地形や住んでいた人びとの暮らしなどを想像を加えてこの埋もれた歴史をひも解いています。それを、こちらの会報に載せ始めて今回で40回目(3年4か月)になります。

しかし、内容が少しマンネリ化してきて記事を読まれる方も飽きてこられたと思い、少し違う内容を盛り込んでいきたいなどとも思っています。そして先月号は4か所ある佐志能神社を取り上げて佐志能の名前の由来などを考えてみました。今回は石岡市染谷地区(六部台とも呼ばれていた)にある「大乘法典日本廻国供養碑」を取り上げ、六部(ろくぶ)について考えてみたいと思います。

(1) 六部って何?

六部の説明は現地の市教育委員会の看板に書かれています。「六部は六十六部の略で、法華経を写経し、全国六十六か所の神社仏閣をめぐって、その法華経を奉納して全国行脚する僧侶をいう。」とあります。中世から近世にかけて各地で行われた巡礼の一種とも思えますが、中世の頃は行者や聖(ひじり)などといわれた人たち(僧侶)に限られていたようですが、江戸時代頃には三十三観音や百観音巡りなどの流行などもあり、この六部も一般の篤志家たちも行うようになったものと考えられます。また六十六か所の霊場というのは全国にまたがっており、これをまわるといいうのは大変なことだったことがうかがえます。

(2) 廻国記念供養碑

この石岡市染谷地区は染谷(そめや)という名前の通り染物職人などが移り住んでいた場所とされます。またこの「大乘法典日本廻国供養碑」が置かれているあたりは少し高台で「六部台(ろくぶだい)」とも呼ばれていたようです。



この地の「須賀田庄右門」という方が日本全国を回って、法華経を納めて結願したのを記念して自宅そばにこの碑を立てたのです。このような六十六部の廻国記念碑はたくさん全国の寺などに残されています。でもここにあるのは特に珍しいもので、板碑に法華経を奉納した場所を表す日本地図が線で彫り込まれていることなのです。いせ・しま・...など国の名前が彫り込まれています。

地図は少し薄くなっていますが、白黒印刷ではわかりにくいですが、これが作られたのは伊能忠敬が

日本全国を回って地図を作製したよりも百年以上前の1694年のことです。

(3) 時代背景を少し紐解くと:

この1694年というと、この石岡はどんな状態だったのでしょうか。常陸府中藩は1602年(1623年)まで出羽国の豪族六郷氏が治め、それから六郷氏が出羽本荘藩へ移ると皆川氏が府中藩に入った。そして、皆川成郷(なりきと)が1645年に死去すると後継ぎがいなかったために廃藩となってしまう。水戸の徳川頼房の五男・松平頼隆がこの府中藩をもらって藩が復活したのは1700年です。

この六部台の台地の少し下ったところの住宅街の中に「金剛山蜜巖寺寶持院」という真言宗のお寺があります。そして、石岡市内にほとんど残されていない皆川氏の記録を示す貴重なものとして、皆川氏(山城守)の弟の墓がこの寺にあります。家督を継いですぐに亡くなってしまった皆川成郷の弟だと思えますが、もう少し調べてみないとわかりません。弟には秀隆、成之の2人がいて2人とも旗本として存続しています。

この宝持院の開基は1444年で本尊は聖観音菩薩と言われています。何度か火災にあつていますが、現在のご本尊が何時制作されたものかは知りませんし、拝観したこともありません。しかしこの寺の末寺だった恋瀬川を渡った志筑(しづく)地区の古い観音堂(かすみがうら市指定文化財・千手観音堂)に立派な「十一面千手観音像」(茨城県指定文化財)が残されています。この観音像はコンクリート製の収納庫に安置されています。



この観音堂は「朝日山慈眼院千手寺」という寺のもので、この染谷の「宝持院」の末寺でした。現在の観音堂は志筑の領主である本堂氏や、近郷近在の人々によって1702年に再建されたものです。今もこの志筑の古い街並みの中にポツンとあるこの建物は目にとまりますが、ただ横を通るだけでは、いろいろな時代背景や石岡などとのつながりなども見えてきません。そのため、気になったらいろいろ調べることが大切なのです。調べてみると知識が増え、そこから見える景色も違ってきます。最近になって、かすみがうら市ではこれらの文化財を年に1度秋に公開しています。この仏像は、寄木造りで表面に金箔を塗った高さも189センチもある大きな仏像です。造られた年

代が不明ですが鎌倉彫刻の様式が感じられるので鎌倉末期から室町時代初頭にかけての像かもしれません。1444年に宝持院が建てられた頃の像ということなども考えられますのでもう少し詳細データが欲しいですね。この地域にこれだけの仏像が残されているのは大変貴重です。

(4) 六部に関する石岡市内のお話し

石岡市内にある社寺仏閣をいろいろ歩き回っていると、この六十六部の廻国記念碑というのを見かけます。最初の頃はよくわからずに見過ごし、たものも多いのですが、思い出すところでは石岡市龍明(貉内)の「長楽寺」、石岡市小屋の足尾神社別当といわれている「大岩寺」にも置かれていたと思います。また仏生寺にある北向観音堂は小野小町がこの観音様にお詣りしたと伝えられるお堂ですが、ここに安置されている聖観音立像は行基菩薩が奈良から連れて来た稽主勲兄弟の作とも伝えられています。一説では、観音を背負った回國六部がここにきて病にかかり、長い間厄介になったある家の主人に観音のご利益を説き、お礼として残したものとされています。

(5) 六部殺しの昔話と時代背景

実はこの六部に関しては各地にいろいろな話が残されています。途中で行き倒れたという話も結構あります。お経を入れた厨子を背負い、鉦や鈴を鳴らし、木戸銭などを乞いながら諸国を廻って歩いたといいますが、全国を回るにはかなりの路銀を持っていたという話もあり、「六部殺し」という少し物騒なお話があります。それは、「ある晩、六部が家を訪ねてきて、一晚の宿を頼んだ。主人は、快く泊めてやった。」

しかし、その六部が大金を持っていることに気がついて、その金を奪うために殺してしまう。そうして、村一番の長者になるが、身内に不幸が降りそそぐ。

そして、ようやく子供ができたが子供は言葉をなかなかしゃべらない。そしてある晩、その子を背負って山道を歩いていたら、

背中の子供が大人の声で「あれもちょうどこんな晩だったね」としゃべった。

そう、六部を殺したのがそんな番だったのだ。

最後にはその一家は没落していった。」

この怪談話しの背景には、ある村(邑)に、よそ者の六部が入ってきて村のある家に泊まった。その後、その家に生まれた赤ん坊が六部に似ていたとか、その家が急に金持ちになったとか、そんな村(邑)社会独特の嫉妬や妬みがこんな話を作らせたものなのかと想像されます。今でもこの身内主義的で部落主義的な考え方がまだ日本の地方に多く残されていることとどこかでつながって見えてぞっとすることがあります。

(6) 夏目漱石の夢十夜の第三夜

夏目漱石の小説に、「こんな夢を見た」ではじまる短い十の夢を書いた「夢十夜」があります。その第三夜に、「六部(ろくぶ)殺し」の話しを元にアレンジしたと思われる創作話が書かれているので少し紹介します。

こんな夢を見た。

六つになる子供を負ぶってる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰(つぶ)れて、青坊主になっている。……声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大

人である。……

(中略)

「御父っさん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

(中略)

何だか厭いぎになった。

早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——ちようどこんな晩だったな」と背中中で独言ひとりごとのように云っている。

「何が」と際(きわ)どい声を出して聞いた。

「何がつて、知つてるじゃないか」と子供は嘲(あざ)けるように答えた。

すると何だか知つてるような気がし出した。

(中略)

雨はさつきから降っている。

路はだんだん暗くなる。

(中略)

「……だ、……だ。ちようどその杉の根の処だ」

(中略)

「御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前……闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、忽然として頭の中に起つた。

おれは人殺ひとごろしであつたんだと始めて気がついた途端とたんに、背中の子が急に石地蔵のように重くなつた。

この話は、100年前に人殺しをした罪を思い出す話であるので、自分の前世で人殺しだったと

いうことになるように思われますが、第一夜では「死んだら墓のところで、百年待つていてください」と言い残して死ぬ女が出てくる。

女の墓の横で100年待つているが、やはりだまされたのではないかと思ひ始めた時に、「石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつてちようど自分の胸のあたりまで来て留まつた」と百合の茎が伸び、つぼみが花開くのです。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。と話は終わります。

こんな風に昔話と小説を世も比べてみても楽しいです。でも小説家はすごいですね。

私の学んだ労音の歴史から……

木下明男

私は1965年労音運動(職場サークルを主体とした音楽運動)に身を投じた。まだ20代の前半で東京の品川区大井町にある日本光学工業株式会社に勤めていた。そのころ職場や会社、社会の諸事情の中で労音のサークル活動に誘われたのです。サークルの代表として地域活動にも参加し、次第に労音運動に感化されていく。

労音時代に学んだ音楽運動の歴史を思い起こしてみた。東京の各地域から集まつた若者たちが「東京労音学校」に参加し、勉強を始めた。その時に学んだテキストから。

(二) 労音を発展させた力

① 関西労音(大阪労音)の誕生

関西労音は1949年11月大阪の朝日会館で、会費50円、会員30名で始められる。大阪では職場毎に組織された音楽サークル(合唱、器楽等)が中心になり自立楽団協議会が組織されていた。この自主楽団協議会が中心組織となり、勤労者の手で良い音楽作品を普及しようと労音の準備会が結成された。敗戦直後、戦前の「日本プロレタリア文化運動」に結集した文化人達を中心になって、日本民主主義文化連盟(文連)が結成され、文化運動に指導的な役割を果たしていたが、その中で「芸術の聴衆組織」を組織すべきとの考えが強くなり、映サ(労映)、労演が1950年に発足し、その一翼として音楽の分野で労音が誕生したのです。関西労音の創立議案書には「今こそ私たち働く者の手で良い音楽を守らなくてはならぬ時が来た」「良い音楽を安くきく、多くの機会を働く者の力で作り出すと共に健全な音楽文化の擁護と発展を図る」と書かれ、その合言葉の基に運動が進み、京都・神戸とまず京阪神方面に運動が始まり、勤労者の音楽要求にこたえ一年後に7246人の会員を組織した。

② 東京労音の誕生

東京労音は関西労音創立から4年後、1953年11月に発足した。活動家が警視庁に呼び出される等の圧迫の中、入会金50円会費70円で、松浦豊明・岩淵竜太郎ジョイントリサイタルが発足例会として主催された。日本電気や沖電気等主に港地域の現場サークルが中心となり、6ヶ月に渡る準備会(主な準備委員サークルは、日本電気・沖電気・東京都庁・全国セメント・オリエンタル酵母・千代田音楽愛好会・森永製菓・千代田合唱団・法務省合唱団・ラジオ北陸・労務省・合唱団白樺)を組織した。活動した人たちは、東京映画サーク

ルの活動家で、会社を休んで職場から職場をへと歩き「関西の成功は東京でも必ず出来る、一緒にやろう」と、下から勤労者の要求と力を基礎にした組織活動を中心に置いた。

最初の準備会では虎ノ門の共済会館(700名のキャパ)を一回の目標にしたが、職場を基礎にした活動が成功し二回も開催した。ひびき(最初は漢字で響・例会整理券・ポスター等は全て委員が自ら作り、例会管理も会員の手で行った。例会は出演者の岩淵さんが解説をし、コンサート終了後の合評会もお茶菓子を囲んで和やかに行った。第一回東京労音例会の成功は参加者を勇気づけ、労音運動の発展の基礎を作り上げた。これは準備会に集まった人たちが仕事を分担し、みんなで活動すれば必ず成功するという確信が得られた。

東京労音の発足が、関西より遅れた主な原因として次の点があげられる。

- ・東京に音楽家が集中しており、毎日どこかで音楽会が開催されていた。
- ・労音の発足前に、東京文化協会や千代田音楽愛好会等の民主的な音楽組織が千名弱の会員しか集められず、上手くいなかった事。その上東京では、都民劇場が活動を展開していた。
- ・地方と違って東京では、勤労者の音楽要求がある程度満たされている、という間違った判断があった。

東京労音の発足は、勤労者の音楽要求が熱烈であったことや、一日の労働を終えた勤労者の心を癒す、今までの音楽会にない質の違うコンサートだった。東京文化協会や千代田音楽愛好会が上手くいなかったのは、一部の活動家の主観と請負で会が運営されていたこと。職場サークルの音楽要

求と組織を基礎にしていなかった事でした。職場サークルを基礎にみんなで民主的に運営すれば必ず成功することを学び、今までの失敗の教訓が正しく生かされた。そして、翌年の7月には一万人を突破する組織に急速に発展した。

当時のマスコミ、ジャーナリズムは、東京全体で音楽人口は二万人しかないと言っていたが、一年も立たないうちにその予想を吹き飛ばした。活動の合言葉は「一人の会員が一人を誘う」でした。

(2) 第2回東京労音総会の意義(1954年10月)
サークル活動を基礎にした労音運動の確立、総会制度の確立と三つのスローガン

(イ) サークル、地域会議、総会制度の確立
東京労音は、東京文化協会、千代田音楽愛好会の経験の中から生まれてきた。その欠陥は前に話したように、一部役員の音楽的趣味や活動に運動が任されていた個人の集合体になっていた。そのため活動が主観的になり大衆的な組織活動にならない欠陥があった。この事を先ず克服し職場サークルの音楽要求を凱一に置き例会に生かしてゆく職場サークルの会員を多くし、職場サークルから役員を出させる。そして、サークルの民主的な協議会体制を確立し、話し合いで必ず一致させる原則を学んだ。こうして労音運動の基礎はサークルにあり、その活動の源泉を此処に置くことを確認した。1954年9月現在の地域別組織状況は、サークル数546、会員数12630名でした。
一年間の活動で会員が10倍、サークルが5倍になった中で、行政区別の地域組織を確立することが労音運動を地域に拡大する最も緊急な任務となり、地域会議が初めてこの総会で規約に入れられ

た。サークル、地域を基礎とする労音の組織は毎年一回活動を総括し、成果を生かし欠陥を克服するため、サークル代議員による総会制度を全国の労音に先駆けて採用し、勤労者の組織原則である民主集中の制度を確立したのもこの総会でした。

第二回東京労音総会は、次のように決議した。

《現在の労音が持つ組織単位(サークルの事)地域を確立強化することは労音を量的、質的に高め拡大する基本である。即ちサークルを真に労音の基礎的な単位として認識の上に組織を確立し、それが地域として横の連携を強め、縦に意思の疎通と幅広い指導性を持つことによって、地域的な文化組織としての意義と効果が生まれ、その中で委員会と直接的な繋がりを持つことが労音の運営の全てを会員ものとし、組織的にも音楽的にも質的向上となり、此の事は同時に比例して量的な発展である事が確認された。

また文化組織としての使命は、労音の立場からいえば音楽が、働く人々の生活の中に直結すること、即ち音楽によつて生活が豊かになり、人間の発展や社会の前進に大きく役立つこと、国民音楽の創造育成があることが言える。これは、我々が孤立した音楽運動を進めるのではなくて、外部のあらゆる民主的な組織との連携を保つことによつて、社会全体を正しく発展させ、その中で我々の音楽運動が結実されるのでなければならない》

(ロ) 三つのスローガンの確立

第二回東京労音総会は、労音の目的とスローガンを次のように決定をした。

目的

①良い音楽を聴く一切の活動を行う事。

②良い音楽を通じ、働くものの豊かな情操と文化教養を高める。

③各単位におけるサークル活動を育成援助しその発展をはかる。

④各単位サークルに於ける自主的な活動および会員相互の交流を土台として働く者の希望する音楽の上演をはかる。

⑤良い音楽を通じて、働く者の文化を打ち立てると共に良い日本文化を創造育成すること。

スローガン

①企画運営は会員の手で

②良い音楽を安く多くの人に

③国民音楽を育成創造しよう

この総会では労音運動の地域的基礎が作られたばかりでなく、政治と音楽、平和運動と労音運動の問題が討議され「国民生活と国民音楽も平和から」との観点で討議され、労音運動が孤立したものでなく、労働運動と民主的運動と協力してゆく方針が確立された。特に上げなくてはならない点は、日本の音楽の方向が、良い日本の文化を創造する方向で「国民音楽を創造しよう」とのスローガンに表され、労音運動の目指す音楽の内容が一般的に提起された。

(ハ) 創立期から学ぶこと

労音運動は、戦後の労働運動、民主主義的な運動と結びついて生まれてきた。いままでは音楽会は勤労者とは無関係のものとして、一部の支配者階級の独占物だった。労働者階級のこの文化的無権利の状態を労働者の文化要求に根差し、文化的権利を戦いところから労音運動は始まった。労音の創立期に学び、今日の労音運動の発展をもたらした理由は次の六点到に要約する事が出来る。

①勤労者の優れた音楽に対する要求に根拠を置いた事。「良い音楽を安く」と言う誰でも要求する運動目標を立て、その要求を如何に満たしてゆか運動の第一に置いた事。

②職場の自主的なサークル活動を基礎にして、民主的運営によって進められた事。

③職場の民主的な運動との結合の中で生産点で培われる勤労者の連帯感に支えられた事。

④「音楽に対する要求を基礎に日本の文化、国民音楽の創造、発展を積極的に目指したこと。

⑤戦前からの進歩的、民主的な音楽運動の遺産を発展的に受け継ぎ、音楽家・知識人の積極的な協力が得られた事。

⑥常に労働組合、友好団体など民主的な諸勢力から援助が得られた事。

以上のような力が縋り合わさつて。一つの力になり労音運動は、会員一人ひとりの力に頼りサークルに頼って発展したのです。

※次回は、第二期(1955年)1960年 労音の全国体制の確立からです。

爽やかさに合えた

伊東弓子

「年齢と共に欲もなくなってくる。穏やかに生きていった方が得だよ。先々の世の中の事など心配しても、何の得にもならないし、自分が病気になるっちゃうよ」と言う人が多い。

でも私は違う。何でも気になることが多いのだらう。気にならなければ楽なのだらうな。その上、こころは天候の変化が激しかった。

鬱陶しく雨が続きたり、日々熱気に包まれて逃げ場のない苦しさ、吸う吐くの息遣いの辛さ、心身ともに疲れきって梅雨の時期を迎えた。

今日は曇りだ。雲が低く周囲に垂れ下がっている。向う場の影が消えている。水面まで灰色となっている。坂を上る一步一步の足が重かった。権現山古墳の前に立つて大きく息を吸っていた。古墳も周りの森も夏草が生い茂って前の空き地に土砂が積まれて見る影もない。それでも灰色一色の一寸前迄とは違って大きな感動を覚えた。低い雲は上り、向こう岸の一軒一軒が見える。流れは水色の絵の具で塗ったようだ。それもその筈、大空が空色一色になっていたのだ。樹々も草も水分を確り吸って、それぞれの色彩を放っている。坂を上る時の愚痴もそこに捨て、疲れた衣も脱いで、そこには爽やかな衣服を着た私があった。

いづみと散歩に出た。堤防には秋桜がぞっくり芽を出し、どんどん延びている様子だ。これを生かし育てれば、播かなくてもいい筈だと思ひ、無駄とは思ったが、会長に話してみた。案の定「今年予算があるからいいんだよ」とのこと。補助金を貰って今年も秋桜播きをすることになるようだ。その中この小さな苗の生命も刈り取られてしまっだらう。刈り取られる前に植え替えようと始まった。生涯学習センターへの新しい道に(肥やしのない土だ)、芥取集場に続く通路沿いに(土手の草を刈って落とされたから折れてしまった)(もう一方では除草剤をまかれてしまった)、植えたが大半の苗が痛手を被ってしまった。みんなの合意を得てした事ではない。勝手に植えた事だからと諦めて、又雨の降る日を待つて植える決意をした。悪条件の場所に一人の人間の思いで植えられた秋桜たちよ、何%かが花を咲かせ来年芽を出してく

れる事を願い、新たな希望を胸に懷いた。

芥問題は頭が痛い、ある人の言葉に反発してても仕様がな。居直って考えてみた。汚い、困ったではなく「芸術品」にしていこうと始まった「婆さんの芥アート」如何でしょうか。賛同していただけたらご一報下さい。

もう一つ嬉しいことがあった。堤防の作業の日「女の人は芥拾いに廻って下さい」と会長の声。喜んで取りかかった。「伊藤さんから何度も何度も芥拾いの事、言われたのでやる事になった」との事だった。煩い、仕様がな、でもいい、先ず皆で実行できた事はよかった。後々続く事を願いたい。

五月の末、生涯学習センターに繋がる道路が開通した。歴史的には、市海道の一部であり(途中に道しるべ：今工事中...がある)館山城への防護の道でもあったろう。細い山道だった。そこが近代的な道路になり、昔を偲ぶ何もないのは悲しいが、特に玉里地区村民の声を形にすべく努力された人のことも聞いている。喜ばなくてはという気持ちもある。

出来た！使う！だけでは、利用者の心はどうなると思い、役所に聞いてみた。「開通式のような形はないのですか」と。「行わない」との一言が返ってきた。現代社会の要望か、地域の人、施設利用者の要求か、利用者には何も伝わらないように思う。人間の便利さを優先して作られた道だ。自然や歴史を押し潰して作った道だ。多くの生命を抹殺して作られた道だ。だからこそ、そこに謝罪や感謝をこの利用する者の気持ちを表して、安全を祈る集い位はあってほしいと、むんむんする気持ちもあったが、其の儘にして何もしないでいた。

ところが二、三日、嬉しいニュースを聞いた。

コスモスの施設を利用している幼子達が、感謝の心を表して集ったという。これこそ人を育てる大人たちが示すべき形だ。大人、地区の人、利用者、施設の役人さん達も子供達に見習うべきだと思う。こういう子供達にこそ未来を託せる思いを感じた。

陽射しの柔らかい日だった。「リリッン」という音に受話器をあげると、とても爽やかな男性の声だった。或る商店で「玉里御留川を歩く会」のチラシを見たという。歴史講座の勉強の中で「玉里御留川」を少し齧った位だとか、今回目にしたことで是非仲間に入れて頂きたいという。新しい参加者が増えた喜びと、耳に残る涼しげな声の人に、何故かお会いするのが楽しみな思っている。

朝霧の深い日だった。いつもより早くいづみと散歩に出かけた。入りの坂を登り切った所に、戦士の墓がある。旧道の境に馬頭観音が建っている。花を飾ることが忘れがちでいたが、その朝は手折ってきた季節遅れの姫紫苑をあげた。その時、あの人があった。緩い坂を上ってきた女の人だった。小ぶりの洋傘をさして、白地の服に、長めのスカート、帽子も靴も絵本の中の人形のような人だった。若くはないが、その雰囲気の合う爽やかな、そして軽やかな歩みの人だった。話しが始まると弱々しく思えた人がとても明るかった。小学校の時の友達が高崎の人だったが、家はどこかわからないままで、柿を取ってくれた畑も何処かわからないという。友達は若い時亡くなってしまった事など、次々話してくれた。得意そうに木に登り、撮った柿を二人で食べ、残りは貰っていった事、自分が弱虫だったから学校でもいつも助けてくれたという。皮膚が弱いからお日様が出ない中に歩いてきたので、もう少し行ってみたいと別れて行った。今住んでいる所は国道に近く、車も多く煩

いし、空気が汚れているの、こちらの方はおいしい空気ね、と何度も言っていたが、森の方へ続く道を歩いていく姿は、絵の中を歩いていくような余韻を残していた。対象的に私はどたと家に戻って行つた。

朝、歯磨きの時窓辺の網戸から蔓が見える。山葡萄の葉も覗く。葉も蔓も朝陽を受けてとても優しい色を見せてくれる。思わず「今日はこんな予定なの」と声をかける。雨の日、風の日さまさまな姿を見せてくれる。

夜はガラス越しに、柿と紅葉が墨絵の様に浮かび上がる。坂を上ってくる車の灯で動く楽しさ。大小の変化とそれらを見ながら「明日も元気でこういう予定を熟せるといいね」と問いかける。心安める美は何処にもあるのだ。自分が気がつかないと思つからないとつくづく感じる。

梅雨の六月、人の心や自然の中から、幾つもの爽やかさを貰った。ここで終るところだったが、最後にアオサギを助けたことは、本当に喜びだった。片足が折れたのか曲がらず羽ばたいても飛べず高崎の共同墓地に疎んでいた。岩間のクリニクへ連れて行って貰った。早くよくなって高崎の空へ戻っておいで、田の上を、霞ヶ浦の仲間の所へきてまた一緒に飛んでよ。待つてよ。

助けたことが梅雨時の一番の爽やかさに合えたことだった。

市指定文化財(四)

兼平智恵子

もうすぐ楽しい夏休みを前にして、今回は筑波山麓の里山にある、体験型観光施設「朝日里山学

校」の紹介から始めます。

JR常磐線石岡駅より車で約十五分、常陸風土記の丘公園の前を通り過ぎ間もなく丁字路、左折するとふるさと農道に入り龍神山を右にして鬼越峠を越えると石岡市八郷地区に入ります。

茨城県畜産センターを左にしながら急カーブを過ぎると、視野が広がり雄大に裾野を広げた紫峰の山がそびえ立ちます。ぐるりと三六〇度、山、山。田園は青々と染められ、あちこちに点在する民家が深緑に埋まっている。私の大好きな風景の中を走りぬけ、五分もたたないうちに、下青柳交差点、右折すると茨城県フラワーパークへ。左折し朝日トンネル方面へと向かいます。通称フルーツラインへ。間もなくイチゴビニールハウスが立ち並ぶ間に、朝日里山学校の看板を左側に見つける事が出来ます。左折すると、高台に学校風の建物が…。到着です。

朝日里山学校は、昭和三〇年に建てられ、平成一六年には廃校となってしまった八郷町立朝日小学校です。

朝日トンネル入口を前にして、筑波山から見ると、東山麓に位置し、イチゴ栽培の多いのどかなところですよ。

子供さん達の声が響いてきそうな、二宮金次郎さんもいます。昔懐かしい廊下、教室。

廃校になった木造建築の小学校を利用して開設された体験型観光施設で、豊かな自然と気候に恵まれて生まれた果樹を中心とした農林畜産物を利用したの農業体験（田植え・稲刈り・じゃがいも・さつまいも収穫等）、工芸体験（竹細工・陶器）、食の体験（味噌・ピザ・ジャム作り、そば打ち）、果樹体験（くだもの食べ放題）等など、子供さんとお孫さんと、グループと、

自然体験をお楽しみ下さい。

各種体験には事前予約が必要。 月曜日休校（月

が祭日の場合火曜休み。 連先先〇二九九―五一―三一
一七 運転しない方には石岡駅から発車の、ぐるりんバス（四・五・六月、九・十・十一月の土曜・日曜・祭日に限り運行）。

市指定文化財の紹介に入ります。

○盛賢寺木造仁王像 有形（彫刻）

昭五三・九・十一

偉大な力をもつ金剛杵を手にし、二体ならんで寺門の入口を守るので二王（仁王）とも呼ばれている。

上半身裸体で頭髮は鬘を結び、金剛杵を振り上げて憤怒の相を表している。口を開けている方を「阿像」、閉じている方を「吽像」で「あうんの呼吸」の語源ともなっている。

山門に示されている仁王像記録伝によりますと、現在の仁王像は二代目であり、初代の仁王尊像は、今から三〇〇年代以前、元禄年間（一六八八―一七〇四）に建立された尊像であることが、尊像の修復で、体内から出てきた木札によって確認された。

それによりますと「享保十九年の正月二八日の夜に類焼により消失（今から二六十年前、元文五年九月に開眼を迎えた二五五年前）」と書かれており、また仏師名は常陸国水戸順礪之濱大和甚之丞成寛造之「吽像」常陸国府中甚七常「阿像」とあり二人の仏師により五年間の歳月を経て、作り上げられた像である事が判明した。

その後、安永四年（二七五五）八月に修繕（三五年後、ひび割れ等による）を行い、更に明治二四年四月、やはり類焼により山門を消失し今から二〇四年前の事、そ

の時の言い伝え（口伝）によると、その時の村人達
は自分達の家屋敷が燃えてる中、命がけで、この
二王尊像を運びだし、守りぬかれたと伝えられて
いる。

当時は水戸藩領地の南端に位置し、宿場（小松屋・
島田屋・つたのやなどあり、現在は屋号として残っている）通り
として大いに栄えていたと言う。こうして伝統と
住民の誇りでもある仁王尊像は勇壮なお姿で仏さ
まと民を守り続けています。

丁度道路を挟み相対して、一条天皇の御世の永
延中（九八七―九八九）の創建と伝えられている井関
琴平神社が鎮座していることに珍しいと尋ねてく
る人もいます。

・刈り込みツツジスキリ 若返る 智恵子

先月の六月号に誤りがありました。訂正のほどお願いいたします。
石岡市ふるさと歴史館電話番号

（誤）0229・23・2398（正）0299・23・2398

武者塚古墳

小林幸枝

随分前から武者塚古墳へ行ってみようと思っ
ていたが、なかなか行く機会を持てなかつた。先
日、思い出したが吉日と小さな用を投げ出して行
ってきました。

武者塚古墳は、土浦市西北部の上坂田の台地で
発見された古墳です。思い出して即実行と出かけ
て来たのですが、案内看板などもなく、だいた
迷ってしまった。

展示施設（石棺・石室などを保護するための建

物)が建っていました、中に入ることはできなかった。窓からのぞいてみると、掘り下げられた地面の下に発掘された石室の上部が見えました。

この古墳の特徴は箱型石棺と横穴式石室を併せ持った石室が発見されたことで、中からは古墳時代の人が結った髪型「みずら」をはじめ銀製の飾太刀や吊り金具、青銅製杓など全国的に例のない貴重な出土品が出ています。

この古墳は、古墳時代末期(7世紀後半頃)に造られたものと考えられており、未盗掘の状態が発見されたことから、貴重な出土品が多数出てきています。未盗掘の古墳が発見されることは、非常に珍しいことなのだそうです。

現在出土品は国指定重要文化財になっており、古墳は土浦市指定文化財となっております。

出土品は、土浦市高津貝塚ふるさと歴史広場に展示されているそうで、次の機会に行ってみようと思っています。

パチンコ考現学 目

菊地孝夫

パチンコ台に使われている玉を打つモーターは、サーボモーターと呼ばれている小型の直流モーターである。

パチンコ台をそれまでの手打ち式から自動式に変えるとき、機械式のバネじかけに変えてモーターで玉を打つようにした。玉を打ち出すスピードを変えるには、交流式より直流式のほうが制御しやすいからである。

打ちだすスピードは一分間に120発以下と法で定められている。手打ち式の時は一分間に16

0発打てた。プロはもつと多く打てたそうだ。

現在一般の送電方式はエジソンに代表される多相交流方式が採用されている。一方それに対しニコラ・テスラは(1857〜1943)は直流送電方式の優位性を主張した。

結果的にニコラ・テスラはエジソン派に敗れてしまう。エジソンが政治的取引によってTeslaの主張を潰したのである。

ニコラ・テスラはアメリカの電気工学者で、Tesla式の交流発電機やTesla変圧器の発明者である。(Teslaと云うのは磁束密度の単位系になっている。国際単位系の組立単位の一つで記号Tである。1Teslaは1ウェバー/m²＝1ガウス。ニコラ・テスラに因む重要な物理単位である。アメリカの電気自動車メーカーの名前にもなっている。)

もしも今日の送電方式がTeslaの唱えた直流送電方式であつたらどうだろうか。

一つは送電ロスと呼ばれる電力の無駄が少なくなる。もう一つは送電線の条数を減らせる。高圧送電線は6条或いは3条であるが直流なら2条で済む。

私たちが使っている家電品、例えばパソコンや電気カミソリ、スマホなどは内蔵するバッテリーを充電するのにアダプターを使って交流から直流に変換している。直流送電であればそんな必要はない。家庭用の太陽電池から直接使うことも可能である。アダプターを使えばそこにはロスも発生する。

照明やヒーターも別に交流の必要はない。

筆者が利用する常磐線は、藤代辺りで一旦交流から直流に代わる。暫く走るとまた直流から交流に代わる。一瞬のことで気付かないが、以前はかなりの間車内が暗くなったものである。

これは石岡市柿岡に国の地磁気観測所がある為である。電車のトロリー線を流れる交流電流によって電磁誘導が発生する。その磁界によって明治のころから営々として積み上げてきた貴重な観測データがダメになってしまいうからである。そのため常磐線を走る車両には交直両用モーターと云う特別のモーターを搭載している。

今のパチンコ台はハンドルの金蔵部分を持つていないと玉が打てないようになっていた。アースしないと駄目だなどと云っていた。アースしなければといってタバコの銀紙などを使ってハンドルと代の金属部分をつないだりした。アース線という商品も五百円ほどで売られていた。筆者も商売道具の電線にターミナル端子を圧着して使っていた。仕事仲間のペンキ屋の親方にせがまれて何本も作ってやった。

「おめえの作った奴は使いやすい」とほめてくれた。そのせいでペンキ塗りの必要な時は、頼めば格安で時にはただでやってくれた。

けれど実はこれは誤解である。人体の持つ静電気を台が感知しているのである。また機種によっては盤面にタッチすると大当たりになったりもする。これもまた人体の微弱な静電気をパチンコ台が感知しているのである。静電気の流れも一種の直流と云える。

学生時代(交流理論)と云う授業があつて微分・積分・三角関数更には厄介な公式などを覚えなければならなかった。試験には苦労して後年テスト

の夢まで見たほどだった。

送電方式を直流に変えるにはボブダイな費用がかかるだろうが今日の太陽光発電所の普及を考えると一考の余地があるのではなからうか。この石岡の周辺でも次々に太陽光発電所がつけられている。そろそろ従来の発想を変える時期であろう。

参考文献・「フライングマン物理学」 岩波書店 「送配電工学」 電気学会、「建築電気設備設計ノート」 オーム社

【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし (17)

さと女

梅雨入り、今年はナニゴトも早いようだ。桜の花が早く咲き、他の花々も早かった。そして季節も早く進んでいるようだ？梅雨入りもいつもより早かった。

●梅雨入り

久々の雨、草花もタップリの水を吸っている、雨にはつゆ草が良く似合う。今朝のNHK深夜便放送で、「二度と来ない1日を楽しくお過ごし下さい。良い1日でありますように」とのアンカーさんの声が流れ、妙にこころにひびいた。

夕方4時頃、コロちゃんの様子がおかしいと思ったら、突然の豪雨が、大粒の雨の中に雹が混じっていた。物凄い音がして、コロちゃん是不安で、おどおどと声も出ない。夫は雨が止むまで子守…数十分で陽がさして来て南の方を見ると虹が…しばらくすると、もくもくと真っ白い雲が湧いてきた。なんともまあ忙しい空模様だった。

小雨が降る中四万騎農園にでかけた。此処の石蔵ギャラーにて、八郷で活躍していた小林恒岳画伯の遺作展が開催されていた。生前ギター文化館時代大変お世話になり、また、山の中腹に建つ自宅にもお邪魔した時の事などを思い出しながら画を拝見した。農園のカフェにより、栗ジャムを購入し、美味しさを東京の先輩方にもお裾分け。昔水戸の個展で購入した栗の画は私たちの思い出。我が家のリビングに飾ってあります。

●食べものいろいろ

お隣さんの“たわらぐみの木”が撓わに実をつけている。むかし、子供さんの卒業記念に植えたもの。グミは栄養価が高く、ビタミンEではフルーツの中でトップクラス。採ってもいいよと言われグミ摘みを、懐かしい甘酸っぱい味がした。只、完熟なので日持はしない。とりあえず焼酎漬けにでもしようか。

一人夕食の日、二週間前仕込んだ山椒の実の醤油漬の味見をした。炊き立ての白いご飯にのせて食べた。程よく口の中に広がる香りと辛味。満足感で思わず、にやけてしまう。それにしても山椒の実を漬け込むまでが大変。実を取るころ合いました。実をかんだ時のしびれる様な感じが最高、暫く楽しめます。ちなみに連れ合いはこの香りが大の苦手。

知人が、悪いけどもらってくれる。車から出した物は沢山のキュウリ。大小不揃いだが採り立てなので艶々している。え！こんなに悪いねと言うと、どうせ捨てちゃうんだからという。今度は私が貰ってくれる所を探した。酢の物、塩漬け、サラダ、油炒めとキュウリづくし、有難い話です。

我家の露地植えのイチゴ、ほおって置いたらドンドン増えて一面イチゴ畑になっていた。何の手入れもせずになっていたが、赤く実っている。夫が見か

ねてイチゴ摘み、其の後ジャムを作っていた。なかなか美味しく仕上がっていた。

雑草だらけの畑、昨年の手の怪我のツケが回って来ている。挽回しようと頑張っているが、畑の仕事をする、家の中の事が出来ない。体力が続かないのだ。つくづく農家さんに感心する。絹さやは全滅、それでもらつきようは食べられるまでになった。甘酢に漬けて楽しんでたべよう！

●外食

昼頃まで来客あり、昼食は買い物がてら外で。偶然オリーブさんの前で楽市さんとばったり。一緒にランチをして、二時間もお喋りしてから買い物。メモして行ったのに肝心な物を買って忘れてしまった。庭掃除に欠かせない竹帚、今年買った物は柄の部分が折れて、もう一本は先の部分が抜けてしまったのだ。少し良いものが売っていないかとわざわざ車を走らせたのに、その部分だけ抜けてしまった。やれやれ。

かすみがうら市五反田にあるピッツアの店「lanana」が開店して早くも10年とか。庭の木々もすっかり大きくなり、緑に溢れていた。若かった時の共有した思い出のあるオーナー夫妻と、時々妙に会いたくなり出かけて行きます。窓から見える林には山百合がいっぱい咲くとか、今度はそのころ出かけて行こう。

●日常

朝5時既に農家さんの仕事は始まっている。ひと仕事してから会社に出勤の方もいるので、この時間は貴重です。いろいろな音がしている、草刈り機の音や果樹を消毒する噴霧の音。屋敷周りをぐるっと歩きながら、今日の予定を考える、気持ちのよい朝日を浴びて草花はイキイキと。これから水やりです。

栗の花が咲き、辺りに独特の匂いを放つ時期、ここ3年程毛虫に悩まされた。4本もある栗の大木が葉を食い尽くされ、地面には真つ黒になるほどの糞が。大木なので消毒も出来ない。当然収穫はなし。それが今年は今までの所大丈夫の様だ。只小さい木の方にはアラワレタ。こちらはこまめにはさみでつまんでいる。昨日の水やりの時には紫陽花の葉がレース状になっているのに気が付いた。葉っぱの周りではなく中の方を食い荒らしている。一体どんな虫が葉っぱを食べているのだろうか？フラッシュと立ち寄った楽市さんのログハウス。社長は相変わらず植え込みに忙しい。インターホンは石の門柱に変わっていた。お土産にお団子を渡したら、帰りに沢山の花の苗を頂いた。さて、何処に植えようか。植えるのも楽しい時間です。

●日常

浅草で育った夫、ネオンがないと寂しいと言っていたが、今ではすっかり八郷にとけこんでいます。何かと忙しくなった今は、少しの時間をみつめては何やら、しこしこ作業を。

ドクダミの花がきれいです。だが、地下茎が伸びて、駆除には厄介です。先日散歩中に八重咲きの綺麗なドクダミに出会いました。その隣にはこれまた綺麗ないろどりの葉っぱのドクダミが。

竹細工の日、早めに作業を終えて師匠の家の辺りを歩く。人家は無く一角には師匠の遊び場の広場がある。広場と言うより林の様な畑の様で、さまざまな植物が植えてある。季節ごとに果実なども実り楽しい場所です。今回は山椒の実を沢山摘んで置いてくれた。ポポは果実から芽が出て「メートル位に育っていた。3人で3本ずつ頂いて来た。山椒の実は今が取り頃、教えられたように下処理して早速漬けてみた。ポポの木は庭に植えたが上手く育ってくれると良いが。

お隣のお婆ちゃんとうとう施設に入ってしまった。

いつも通りの長椅子に座って、外を眺めていたお婆ちゃん。その膝の上、両隣、足元で猫たちが見守っていた。それなのにもう何日も帰ってこない。夕方には玄關前に何匹も集合している。お婆ちゃん、何処に行っちゃったのかなあ。

●八郷の外で

「ふるさと風の会」12周年記念展が石岡市内の情報センターで。会場に入ると、ことば絵作家の兼平智恵子さんによる五百もの顔が出迎えてくれた。ふるさと「風」の会報、毎月1回、欠かさずに発行して144号、凄い事です。会の皆さん、あと何年頑張れるかな？と、見まわしてみれば皆さん全員が、お年を重ねている。ランチは町中を歩いて、駅近くのレストラン「ティアラ」でゆっくりと。

夫が、急に映画見に行くぞ、空いてる日は今日しかない、と言うわけで出かけることになった。

電車で柏まで、柏には高島屋がある。折角だから買い物を兼ねてと思って、大枚を持った。久しぶりの都会だし、大枚の入っているバックはショルダーバッグにしてしつかり首に掛けた。終わってから食事だね、とか思いながら映画を見ると、隣接している高島屋に入り買い物をしようとする。時間が無いよ、4時から会議なんだよ、と、あれ！食事は、買い物は？と言うわけで昼食は駅の立ち食いソバ350円なり。映画はもちろん感動しました。先日の映画、おだやかな革命を思い浮かべながら、布団干しをしているとお隣さんが、インゲン沢山とれたからと持ってきてくれた。丁度暮しの豊かさって何だろうなんて考えていた所だったの、こういう毎日暮らしの豊かさないんじやないかなと、ふと思った。

ストレッチの日、硬い体をほぐし、心地よい汗を流す。お隣の部屋では人形作り、矢部さんの指導を受けたグループ、楽しそうに製作している。

時々お邪魔しては見せて貰っています。窓の外には徳利の様なものが製作中、蜂の巣かな？

養生日記

堀江実穂

・某月某日

一年以上前の事。あいふあーむのs主任さんが来なくなった。心の病気になってしまい、病院に通っていると聞かされた。そしてこの間、正式にあいふあーむを辞めたそうである。

とても優しく、信頼できる人であった。私も気さくに話せる唯一の職員さんだった。だから辞めてしまったと聞いて、とても悲しかった。やっぱり人間とは完璧な人はいないのだなと思った。

s主任さんの様に、優しく指導してくださった人も、疲れてしまい心の病気になってしまうことがあるのだ。人間の心って繊細で分からないものだ。

・某月某日

私の通所している作業所には、いろいろな人がいる。知的障害者、精神障害者、身体障害者等々。中には宇宙からやって来たのではないかと思える人も居る。

突然、女性の職員や利用者さんに対して「僕と結婚してください。旦那さんと別れて僕の子供を産んでください」などとビックリするようなことを言っていて、いつも職員さんに怒られている。見た目は大人なのだが頭の中は子供のままである。突然部屋の中を駆け回って奇声を発したりする。この間は、椎茸ハウスで、まだ小さな椎茸を全部収穫してしまった。何回も注意されているのに、同

じことを繰り返す。その人は、叱られている意味が分かっていない。もしかしたら全部収獲したら褒められると思っていたのかもしれない。いや、自分の気分としたら奇麗に摘み取った方が奇麗だと思ったのかもしれない。

・某月某日

デイケア時代に、よく酒飲みについていたおっちゃんが突然一人部屋で死んでいた。自殺じゃないかともいわれている。躁鬱病のおっちゃん、躁の時はかなりのハイテンションで喋り出すと止まらなくなった。こうだっぺ、と一人で延々と喋っている。

逆に鬱の時は、居るのか居ないのか分からないほど静かだった。

私の言っている集会に一緒に行った時、会の人達に私の悪口を言いふらした。そうしたら会の人達は、おっちゃんの話信じて私に非難の目を向けるようになった。私としては納得のいかない事だったが、おっちゃんは嘘の話だったと言わない中に亡くなってしまった。

あんなに元気だったのにと思うが、人の一生なんて分からないものだ。

《風の呟き》

イタリアの田舎

打田昇三

イタリア観光と言えばバリ・ミラノ・ローマなど南下してもナポリ辺りで止まると思うが私が再就職現役の頃に関わりのあった旅行社が「南イタリアの田舎」と題するツアーを突き付けてきた。平成十四年春の頃である。無視しても良かったの

だが田舎の爺さんは「田舎」と言う言葉に弱い。イタリアは「南部、北部、シチリアなど島嶼部」に大別されるが、ナポリから下、長靴の踵（かかと）部分に当たる南イタリアの田舎は知られていない。其処を十日間も掛けて回る旅というタイトルに負けて料金も安かったので行くことにした。成田くパリくローマとエールフランス機で運ばれ、更にアリアタリア航空の旧型機でバーリと言う都市に着いたが真夜中なので何処だか分からない。それでもホテルはアンバサダー系らしく星が四つ付いていて、一夜明けて周りを見ると工場地区に「日本企業」の名が有り、人口は四〇万と言う。西暦三九五年にローマ帝国が東西に分裂した後、南イタリアに進出したビザンチン帝国の統治拠点がこの地であつたらしい。早速、連れて行かれたのは神聖ローマ帝国皇帝が十三世紀に建造したと言う八角形の古城であるが規模が小さく、ごみ焼却場にしか見えない。それでも世界遺産らしい。アドリア海沿岸に出て、十字軍時代に遠征基地として繁栄した港町を巡る。アドリア海には多くの魚類が生息するが潮流の関係でイタリア側には魚が寄り付かないらしいから漁港とは言えない。其の場所から車で一時間ほど行くと「アルベロベツロ」と言う、舌を噛みそうな名前の町がある。此の町は特に古い都市でも無く土地は痩せて四季を問わず風が吹きまくり是と言った産業も無い。其処に世界中から観光客がやって来るのである。十五世紀から十六世紀にかけて此の辺りはスペインの統治下にあつた。辺境に住まわされた人々は思い思いに家造ったのだが政府は其れに税を課そうとした。周辺からは鉄片状態の石灰岩が取れる。住民は其れを積み重ねて屋根とし「是は取り外し出来るので家屋では無い！」と抵抗した。

周辺には近代的な建築物も増えているが「トゥルリ」と呼ばれる「トンガリ屋根」は観光の目玉として保護されており是も世界遺産である。

其処から、かつてローマ帝国が軍用道路としていたアッピア街道を南下しアドリア海の出口に当る都市プリンデシに向かったのだが、バスの運転手が道を間違えた。イタリア人でも余り知らない田舎に来てしまったらしい。かつてシーザー、クレオパトラ、アントニウスらが船出した港であり、紀元前四〇年には初代ローマ皇帝・オクタ비아ヌスが「三頭政治」を行うためにアントニウスらと呼び集めた場所らしいが、現代では「アッピア街道の終点」を示す記念柱が一本（二本のうち一本は盗まれ）、其れも修理中で見られなかった。

昼食後に少し離れたレッツェと言う町に行く。戦国時代に来日した宣教師ザビエルが所属したカトリック擁護派の拠点らしいが、中央広場に立派な塔が立っている。其の塔と言うのが「プリンデシで盗まれた」塔である。重い塔を盗むのも大変だと思うが：細かい事は忘れて西海岸のナポリへ向かう。ナポリの考古学博物館には「イッソスの戦い」を描いたモザイク壁画が有る。アレキサンダーの活躍を伝える貴重な史料だが残念ながら写真撮影は許されず絵葉書を買う：出来ればもう一度行きたいコースだが、高齢者は歩けない。

猫のパトロール

菅原茂美

我が家には白黒ブチの雄猫（12歳）がいる。名は「半次郎（半白）」。名前の由来は顔の左半分だけ白いから。「箱根八里の半次郎」に因む。他の猫の面倒見がよく義侠心が厚い。半次郎の母親は宿

無しの流れ者。ある時我が家に迷い込んできた。真つ黒で、お世辞にも美貌とは言えない。

我が家には、3人の幼い孫娘がいた。私自身獣医師の立場から言うなら、ノラネコにはトキソプラズマ（原虫）という人畜共通の寄生虫病が高い確率で存在する。殆どの温血動物に感染。ネコが終宿主でヒトなどは中間宿主。ネコにはあまり害をなさないが、人に感染すると、特に女性は、妊娠中なら胎児の発育停止・死産・水頭症など酷い障害を起こす。

園児の砂遊びは、ネコの糞からトキソの卵（オシスト）が、消毒薬や紫外線に強く、長期生存し、感染源となる可能性大。手洗いなど重要。妊婦だけでなく、誰でも体調不良や、免疫力低下時に感染すれば、各臓器の出血や肝炎・脳炎など、酷い時には死に至る。脳にトキソが感染すれば、男性は攻撃的になり、女性は「ふしだら」になると言われる。私は今、悪性リンパ腫を発病。白血球が正常値の2分の1しかない。即ち感染症に非常に弱く、ありふれた常在菌に対してもすぐ敗血症の恐れがある。それゆえ畑の土に触れる時は、プラスチック手袋が必需品。ネコを飼う責任は重大。更にトキソがネズミに感染すると、鼠は猫を恐れなくなりむしろ寄り寄っていく。ネコを終宿主として、ウルトラCの進化を遂げた原虫である。今は良い薬があるが、なかった時代には、豚が大量に死亡し、養豚業は大被害。

そんなわけで私は、野良猫や、トキソプラズマ検査マイナスの証明がない猫を飼う事は、反対であった。しかし妻は「かわいそう」が先に立ち、私の意見を聞かず、エサを与え始めた。

私は特に家庭の「和」を重んじるから、妻に妥協し、更に自転車置き場の片隅に、手ごろなハウ

スまで作ってやった。ただし、我が家は新築したばかりなので、柱に爪とぎの傷をつけられなくなったため、妻が何と言おうが家屋への昇殿は許さなかった。即ち軒下暮らしを強要。（私は岩手の寒村育ち。7人きょうだい。戦後暖房などない時代の寒い冬にはネコを湯たんぽ替わりに奪い合い）しかし半次郎の母御には、色々予防注射や治療もしてやり、常（とわ）の住みかを許し、悠々自適の生活。そして13年前、4匹の子猫を産んだ。

所が離乳直後、母御は突然我が家に戻ってこなくなつた。事故にでもあったか、覚悟の家出なのか？ 生まれた2匹の雌は、運よく貰ってくれる人がいた。残り2頭は雄。ところがその1頭は癲癇持ち。塀の上などから落ちて痙攣が止まらない。もう1頭の、即ち後に「半次郎」となる家督は、懸命に癲癇の介護をする。しかし癲癇持ちは離乳後2か月くらいでハウスの中で死亡したが、半次郎は、いつ迄も体を温めてやっていた。更に半次郎は幾多のノラ仲間を連れてきては、エサをやってくれとせがむ。しかし心を鬼にしてやらなかったら、遂には若く可愛い雌猫（茶虎）をつれてきて、この子にエサをやらなければ、俺はエサを食わん……と強硬姿勢。やむなく茶虎にエサをやり、避妊手術をして、飼い始めた。今は満足そうに夫婦気取り。

さて義侠心厚い半次郎であるが、ネズミ・モグラ・スズメなどよく獲ってくる。人に飼われても野生は失っていない。結構我が家の役にたっている。私の趣味である「家庭菜園」（今年で5年目）に立ち入り、排泄するのはちよつと困るが、その代わり、私は枝マメ・エンドウ・ササゲ・インゲン・ソラマメの5種の豆類を、毎年播種するが、ノバトは周囲に多数いるのに、防鳥網等やらなくとも、

ハトに豆を盗られた事はない。考えてみると、半次郎のパトロールのお陰。よくカップルは畑で日向ぼっこをしている。

但し、イチジク、トーマロコシは熟すと、いきなり「ハクビシン」にやられる。ハクビシンに限らず、動物は生まれながらにして、糖度計を持っている。持っていないのは、進化に遅れをとった、哀れな人類だけ。それにしても、半次郎はハクビシンと闘ったのか、傷やケガが絶えない。

日曜朝のNHK「野菜の時間」では、豆類を播種したら、必ず防鳥網を忘れずに……と指導しているが、私は半次郎様のお陰で、毎年、一手間省略でき、片眼が見えなく、平衡感覚の鈍った私には大助かり。人と猫とのささやかな信頼関係。国民栄誉賞は無理としても、半次郎様を、県民栄誉賞にでも推薦したいくらい。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第八（二・二）

水島合戦（みずしまかつせん）のこと

平家一門が京都から西国に疎開したあと、源頼朝は鎌倉で自己満足し、木曾義仲が京都で猫と遊んでいる間に讃岐の屋島に住み付いた平家は金毘羅様の御利益もあって勢力を盛り返した。原本に従えば播磨、美作、備前、備中、備後、安芸、周防、長門の山陽道八か国（兵庫県から山口県にかけての沿岸部各県）と紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐の

南海道六か国（和歌山、兵庫、徳島、香川、愛媛、高知の各県）を勢力下に置いたことになる。木曾左馬頭（義仲）は、心穏やかなことでは無いと（平家に敵対する者は誰でも思うが）討手の軍勢を差し向けることになった。

結論を先に言ってしまうと、この戦いで木曾義仲の軍勢は平家に大敗をさせられた。義仲が世間慣れた人物ならば、鎌倉に援軍を求めて功の一端を源頼朝に与えて置けば歴史は少し変わったかも知れないが、戦術に長けていても戦略を知らないから自分の軍勢だけで平家を攻めることにして、討手の大将に矢田判官代義清（八幡太郎義家の曾孫に当たる関東武士を当て、侍大将には清和源氏の末流で信濃武士の海野弥平四郎行広を据えた。総勢七千余騎を山陽道經由岡山県倉敷市水島に送り、其処から船で四国・屋島を攻める作戦で準備を進めていた。平家物語には書いてないが木曾義仲は此の時に腹心の樋口兼光を京都に残留させていたらしい。京都も油断出来なかった。

寿永二年（一一八三）閏十月一日、浜辺に居た源氏の目に一艘の小船が沖に現れるのが見えた。

一艘だけであるから漁師の船か海女の船で有ろうと思っていたところ、是が「牒の使い」と言つて宣戦布告状を届けて来た平家の船であった。慌てた源氏は陸に上げて有った五百艘の軍船を大騒ぎしながら海に浮かべている所に平家の軍船千余艘が押し寄せて来た。平家軍の総大将は大手に新中納言知盛（宗盛の弟）、搦手（からめて＝裏に能登守経経（宗盛の従兄弟）が就いていて、其の能登守が部下に対して次の様に指示した。

「良いか、者どもよ。今回の戦は慌ててはいけない。ゆっくりと戦え。北国の奴ばら（木曾勢）に生け捕られるのを嘆かわしいことと思え。その為に

味方の船は連結せよ……」其れにより平家方は千余艘が船首と船尾が連結されて、その間に板を渡したから、船上すなわち戦場が平坦になった。

源氏、平家両軍は閏（とき）の声を上げ、合戦の合図を交わしてから戦闘を開始した。互いに船を押し合わせての合戦になった。少し離れた敵は弓で射て、近い敵は太刀で斬り合い、或いは熊手に掛けて敵を討つ者もあり、逆に熊手にやられる者もあり（熊手と言っても鉄製？）中には組み合いの俣で海に落ちる者もいた。船上からではあるが敵との距離は近い。接近戦になるので敵と刺し違えて（両方が死ぬ者も多かった。思い思いにそれぞれに勝負をした。

源氏方の侍大将である海野の弥平四郎は討たれてしまい、是を見た大將軍・矢田の判官代義清ら主従七人は小船に乗って先頭に立ち敵の真正面に進んで戦っていたが、どうしたのか急に船が沈んで七人が全員死んでしまった。平家軍は鞍を付けた馬を船内に並べていたので源氏勢は船を敵船に寄せ馬を避難させてから攻撃するので、その間に敵に討たれる確率が高い。それでも波状的に攻撃を掛けたのであるが、遂に大將軍まで討たれてしまった。そうなると逃げて行く他は無い。結果として平家が水島の合戦に勝ったことで其れまでの合戦に敗れた恥辱、諺に言う「会稽の恥」古代中国の春秋時代にあった合戦による復讐談」を雪（そ）いだことになる。

瀬尾最後（せのおさい）のこと

水島の合戦で源氏軍は壊滅的な打撃を受けた。その知らせを受けた木曾義仲は「一大事！」と気

がついて、自ら一万騎を率い山陽道へ向かった。

其の頃、備中国の住人で平家に付いていた瀬尾太郎兼光という武士が居り巻第七「倶利伽羅落」で源氏軍の倉光次郎成澄に捕らえられ、成澄の弟・倉光三郎成氏に預けられていた。成澄兄弟の祖先は平安時代に関東の国司も務めた伝説の武将・藤原利仁なので瀬尾が負けても仕方がない。瀬尾も大力を知られた武士であつたから木曾義仲が惜しい武士として斬らずに助けたのであるが、捕虜になつても心掛けが良く、相手に良い印象を与えるので大事にされていた。

然しながら昔、中国で漢の武帝に命じられ匈奴に使臣として行つた蘇武が捕らえられて帰れず、また李陵が匈奴（遊牧民）の捕虜となつたように遠く異国に身を置かれることは悲しみである。動物の毛皮で雨風を防ぎ食べ物には生臭い肉や乳類で喉の渇きを癒し、夜は寝る間も十分に無く、木を切り草を刈るなどの労働に耐えて捕虜たちは、いずれも故国への帰還を夢見ていた。それと同じ様に瀬尾も「今一度平家の許に帰る」ことのみを念じていたのであり、その心中は誠に恐ろしい。

或る時、瀬尾太郎が倉光三郎に向かって言う。「去る五月に討たれるべき命を助けて頂き、今では誰を誰と特別意識することが無くなりました。

（平家の武士である意識が薄れました）この後は合戦があれば木曾殿に命を捧げます。取り敢えずこの兼光が貰っていた領地（備中瀬尾）は馬の放牧地として良い所がありますので、貴方様から木曾殿に申し上げて下さい……」

是を信用した倉光は義仲に報告をした。義仲も馬の餌には気を使っていたようで直ちに、「神妙な事を申すものである。それならば其の方が妹尾を案内者として先ず現地に行つて、馬の餌を確保し

ておけ：」と命じた。倉光三郎は喜んで三十騎ほどの兵力を連れ、瀬尾を案内者として備中国に向かったのである。ところが其の頃、瀬尾の嫡男である小太郎宗康は平家の陣営に居た。連絡を受けて父親が帰還するというので自分の家臣を集め、五十騎ほどで播磨の国府(姫路)まで迎えに出た。

其処から岡山へ入り一行は現在の備前市三石に宿をとった。其の夜に、瀬尾の親しい者たちが集まって盛大な酒宴が開かれ、倉光三郎たち三十余人は起こされても起き無い程に寝込んでいるところを刺し殺された。備前国は平家と交戦中の十郎藏人が領主であった。事件を知った十郎の代官が国府から押し寄せて来たけれども負けてしまった。瀬尾は「この兼康は従来の縁を切つて自由軍となり、平家に味方する。もし同じ志がある者は私に従つてくれ。是から木曾殿が下つて来るのを迎え討ち矢一筋でも射掛けるつもりである」と考えを述べた。平家の地盤でもあったから備前、備中、備後の三か国から志願兵が集まったのだが、元氣な者は既に平家に徴用されていたので現れた者は休職中の者や高齢者で碌な武器も持つて居らず、粗末な戦仕度であった。武装も紐で補強したり、

からげたりして、矢も狩り用の筒に差し、それぞれが思い付いた格好で出て来たのである。それでも人数は二千余に達したので、それを率いた瀬尾は岡山市郊外の福竜寺縄手辺りに幅六メートル深さも同じ防御陣地を構築して敵勢を待ち構えた。

一方、源氏方は十郎藏人の代官が討たれたので其の家来たちが京都に逃げ帰る途中で播磨と備前の国境付近にある船坂峠に来て西に向かう木曾義仲と行き会った。其処で瀬尾太郎の裏切りを聞いた義仲は「許せぬ！奴を斬つて置けば良かった」と後悔をしたのである。重臣の今井四郎が「それ

だからこそ、瀬尾の面魂が只者に思えず、私が何度も斬ろうと申し上げたのに(義仲が)助命されたのですから：」と言った。義仲は言い訳のように「瀬尾が背いてもそれ程の勢力ではあるまい追いつけて討て！」と命じたけれども、今井四郎が「先ずは私が様子を見てきます」と三千余騎を率い現地に急行した。

瀬尾太郎が立て籠った福竜寺縄手は街道筋から四キロ程の細い道を入つて行くらしい。その左右は馬でも沈むほどの深田であるから、三千余騎で押し寄せる源氏勢も心は逸れど登下校する小学生の様に列を作つて行くほかは無い。原本には馬次第と書いてある。責任を負わされた馬も氣の毒：。苦勞をして敵陣に到達すると、粗末な城の櫓の上から瀬尾太郎が大声で挨拶をした。「去る五月から今まで、斬られても仕方の無い命を助けて頂き有難うございます。皆様方にお礼として是を用意致しました：」そう言うのと、揃えていた弓の上手な数百人の兵が一斉射撃をしてきた。その激しさにとても正面から攻めては行ける状態では無い。

それに構わず今井四郎をはじめ楯、禰井、諏訪、藤澤、宮崎三郎(越中武士)など勇猛な武士たちも兜を前に傾けて顔面を防ぎながら射られた人馬を集めて堀を埋め、猛然と攻撃を続けた。道の左右は深田であるが、其処にも乗り入れ群れをなして一日中、果敢に攻撃を続けた。瀬尾が狩り集めた兵たちは予備役が多かったから実戦に慣れていない。合戦が長時間に及ぶと戦力が落ちる。源氏軍の果敢な攻撃で戦死者が続出した。瀬尾太郎と残党は備中国板倉川(岡山市内)まで退いて陣を立て直し源氏勢を待ち構えたけれども基本的に兵力が少ないから押し寄せた今井の軍勢に攻められ持っていた矢を射尽くしてから逃走した。

瀬尾太郎兼康は主従三騎になり板倉川から現在の総社市方面に落ちて行つた。北陸の合戦で瀬尾を捕らえた倉光次郎成澄が「此の合戦で弟が討たれたので、此の俣には出来ない。もう一度、捕らえなければ：」と軍を抜けて瀬尾を追つた。相手との距離が百メートル程になり、其処で「瀬尾殿、卑怯にも敵に後を見せるのか、引き返せ」と声をかけた。瀬尾は板倉川に入りかけたところで呼び止められたから川の中で待ち構えた。倉光が追いついて組み合いになり二人は川の浅瀬に落ちた。共に大力の武士なので上になり下になり戦っているうちに深みに入ってしまった。追い掛けた倉光は泳ぎが得意では無い。瀬尾のほうは水練の達人であつたから、鎧兜の重みで動きの鈍い倉光を河底に抑え込んで刺し、其の首を取つた。

岸に戻つてみると自分の馬は主人がやられたと勘違いして、さつさと引き揚げていたから倉光の馬に事情を説明して乗せて貰つた。暫く行くと嫡子の小太郎宗安が部下数名と徒歩で逃げて行くのに追いつき合流したのだが、小太郎は名前に似ないで肥つていたから歩くのも容易では無い。鎧兜を捨てても歩みは遅い。道草は食つたけれども、戦場離脱の途中であるから先を急ぐので、瀬尾は千五百メートルほど逃げ延びた。其処で家来に会つて「自分は千万の敵を相手に合戦するときは晴れ晴れとした気持ちで居られるが、今度のように(負け戦で)小太郎のことも捨てて行かねばならない状況では全く先が見え無い。もし生き延びて再び平家に仕えたとしても、仲間たちに「兼康は六十にもなるのに、幾らでも無い余命を惜しみ只一人の子を捨てて逃げた」と言われることが恥ずかしい」と言えば、その家臣が「それならばこそ父子一緒でどの様にもなられるように：と申し上げ

たのです。今からでも引き返して下さい」と言つたので瀬尾兼康は息子の許に引き返した。

戻つて見ると小太郎は足が腫れあがつて歩ける状態ではなかった。兼康は「お前が追い付いて来ないので一緒に討死にしよう」と戻つて来たのだが具合はどうなのだ？」と問えば、小太郎は涙を流して「この身が愚おろかな為に自害も出来ずに居ります。もし私の所為で父上が敵の手に掛かる様なことが有れば五逆罪（仏教で言う父母殺しなどの重い罪）になつてしまいます。どうか私に構わず落ち延びてください」と頼んだ。

しかし兼康は「私も既に覚悟をしている！」と言つて、一息ついているところに今井四郎が率いる木曾軍が五十騎ほどで追い掛けて来た。兼康は残つていた七、八本の矢を放つと五、六騎の武者が倒れたようである。其の後に太刀を抜いて先ず小太郎の首を討ち落とし、それから敵陣に斬り込んで多くの敵を倒してから討死した。付き添つていた兼康の家来二人も、主人に劣らず奮戦したが重傷を負い自害しようとして捕らえられ二日後に死亡した。源氏は合戦勝利の証拠として三人の首を鷲の森に展示したのだが、是を見た木曾義仲は「あつぱれな勇者である。彼らのような者を一騎当千の武士と言うのであろう。助けることが出来ずに残念である」と、其の死を惜しんだ。

室山（むろやま）のこと

現代にも通じることです。「身の程知らず」と言う言葉が有るが思ひ上がつて不相応な願望を持てば何処かで綻（ほころび）が出る。木曾山中から平家打倒の軍を起こし、破竹の勢いで勝ち進んだ義仲も

京都を抑えてから其の気になり過ぎて各地に敵を増やしてしまふのである。それでも敵を抑え込むだけの武力が有れば良いが、義仲が頼れるのは自分の兵力と、平家打倒を各地に触れて回つた新宮十郎行家（義仲の叔父）の兵力だけである。その行家も甥の風下で満足出来る人物では無い。

西国へ落ち延びて行つた平家が勢力を盛り返したことを知つた義仲は、備中国万寿の庄（岡山県倉敷市郊外）で勢力を立て直し、平家が基地とする屋島へ攻め込もうと準備を進めていた。其処に京都の留守を任せてあつた樋口次郎兼光から使者が来て「新宮十郎藏人殿が、殿（義仲）の留守を良いことに後白河法皇に取り入り、有ること無いことを告げ口しているようです。放つては置けないので四国攻めは後にして大至急、都へ戻つてください！」と知らせて来た。そこで義仲は予定を変えて大急ぎで京都に戻ることにしたのである。

此の事を察知した十郎藏人は「これはマズイ！」と都を離れたのだが、義仲に逢わない様にと丹波路經由で播磨国（兵庫県）に行き、義仲は大阪經由で都へ戻つてきた。一方で平家のほうは木曾義仲を討とうとして大軍を派遣することにしたので木曾義仲は自分の計画が間違ひでは無かつたことを知ると共に、立場が微妙になつていた。

平家の方は憎んでも余り有る木曾義仲との対戦を想定して兵力を結集して来るので、先ず大將軍には新中納言知盛（宗盛の弟）と本三位中将重衡（知盛の弟）を据え、侍大将には越中次郎兵衛盛次（平家庶流、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清を当て二万余騎の軍勢を揃えた）と原本に書いてあるが平家一門は寿永二年八月六日に後白河法皇の詔によつて官職を削られているのであるから、豆類では無いが大納言も中納言も無い筈である。

それは兎も角、平家軍は多数の軍勢を船に乗せて播磨国に押し寄せ播磨灘に面した揖保の丘陵部に当る室山に陣を布いた。そこで、木曾義仲との関係がこじれてしまった十郎藏人が平家と合戦して義仲との関係を修復しようと思ひ立ち、五百余騎で室山へ攻撃をかけた。平家軍は兵力に余裕があるから陣形を五とおりに備えて第一陣には越中次郎兵衛盛次の二万余騎、第二陣には平家一族と思われる伊賀平内衛門家長の二万余騎、第三陣には上総五郎兵衛・悪七兵衛の三万余騎、第四陣には本三位中将重衡の三万余騎、第五陣には新中納言知盛が一万余騎で固めていた。其れだけの軍勢を有する平家軍は多分、作戦で第一陣から順に縦並びに配置していたようである。

それを知らない十郎藏人行家は僅か五百余騎しか居ないのに喚声を上げながら平家の第一陣に突入した。越中次郎兵衛盛次は応戦する振りをして暫く遊んでから正面を開けて敵を第二陣に誘導した。第二陣も同じようにして第三陣に送り、第三陣も適当にあしらつてから第四陣にご案内した。第四陣も敵軍を顔パスで通過させて第五陣に取り込み、其処で改めて喚声を上げてから総員で囲んだから、幾ら馬鹿でもダメだと分かる。十郎藏人は騙されたと気付いても手遅れであるから必死に戦う他は無く、逃げる方法も無い。

平家の軍勢も「源氏の大將に組め！」と口では言うが、それを実行する者は居ない。それどころか中心部での激戦が続く中、第五陣を形成していた新中納言知盛の主だった家臣である紀七左衛門・紀衛門・紀九郎なども討ち取られてしまった。激戦が続く中、十郎藏人の軍勢は五百余騎が次々と討たれて、残りは僅かに三十騎程になったが回りは全て敵である。どの様にして危地を脱するか

見当もつかなかったが、思い切って敵の大軍の中を割るようにして走り抜けた。十郎蔵人は其れほどの怪我はしていなかったが、従っていた家臣たち二十余人は大部分が重傷を負っていた。大敗の戦場を逃れた一行は加古川河口の高砂から船で戦場を脱出し和泉国（大阪府南部）に着いた。其処から河内国に入り現在の河内長野市にあった長野城に籠ったのである。平家側は水島の戦い、室山の戦いと二度に亘る勝利で勢いが増してきた。

（続く）

温暖化の影響なのだろうか、季節が思わぬ速さで移ろっていくようである。早々と梅雨が明けたと思ったら、再び梅雨前線が発達して、各地に大雨をもたらしている。会員のほぼ皆が古希を過ぎた当風の会のメンバーであるが、季節の陽気についていくのも容易ではない。

先日、打田兄が、今手掛けている私本・太平記の原稿を持って来てくれたが、この時代と現代には通じるものが多々あるように思う。人の世の業とは過去も現在も変わらないようである。

この業を醜いと思うか愉快と思うかは、人それぞれであるが、この私は、人間と云う奴、全く懲りない奴だと笑ってしまった。（白井）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風劇団「ことば座」団員&朗読教室生募集

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。
月1回コース(受講料:¥6,000 円) 2回コース(受講料:¥9,000 円)

連絡先 080-3125-1307(白井)